富山県俳句連盟会報

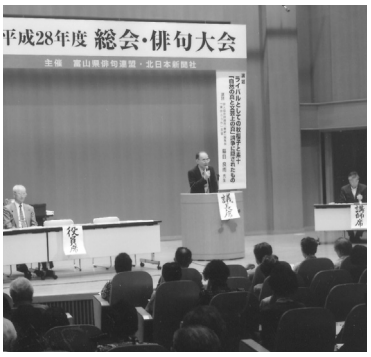
第 82 号

平成二十八年七月一日発行
富山市安住町二―一四
〒930-0094 電話 〇七六-四五五-三四三
振替番号 金沢 五―一七一〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

平成二十八年度 総会及び俳句大会

蟇目良雨先生の講演を聴く

平成二十八年度総会及び俳句大会は、初夏の良く晴れた六月四日（土）午後一時より北日本新聞ホールに於いて百三十名の参加を得、開催された。坂田直彦幹事司会のもと、中坪達哉会長は「俳句に代表される短詩形が注目されている今、ぜひ次世代への縦の糸を繋げて欲しい」と、挨拶。



（挨拶の中坪達哉会長）

総会の議長に新保吉章理事を選出し、浅野義信事務局長が平成二十七年度の事業報告、収支決算報告を行い、大久保置箔監事が監査結果を報告し、これらを承認。さらに平成二十八年度事業計画案、収支予算案を提案し、原案通り拍手で承認された。その後役員の岩城未知理事、金盛江美幹事の退任に伴い、中坪達哉会長から、新理事に布本美知子氏を、久崎富美子理事を幹事に就任する事を提案し、承認され、全ての議案は可決し、総会は滞りなく終了する。

続いて「春耕」編集長、俳人協会評議員の蟇目良雨先生の記念講演に移る。

演題は「ライバルとしての秋櫻子と素十」を主題に「『自然の真と文芸上の真』論争に隠されたもの」とされ、レジメをもとに何事にも表と、裏の事情があることを熱く論じられた。（講演要旨は別掲）

小憩後の俳句大会に移り、すでに出句されていた七五二句（三七六名）について、講師及び連盟役員によって選考された特選句並びに入賞句を田村京子、野中多佳子両幹事が披講し、表彰式に移る。

まず講師の蟇目良雨先生より丁寧なる講評を戴く。続いて寺田幹北日本新聞社文化部長から北日本新聞社賞、又、中坪達哉会長から連盟賞をそれぞれに贈呈された。（成績は別掲）

但田長穂副会長が閉会の辞を述べ、総会、俳句大会は盛会裡に終了した。

富山県俳句連盟 夏季吟行会（予告）

日時 七月二十四日(日)午後一時より
会場 庄川生涯学習センター
砺波市庄川町青島三六〇七
TEL 〇七六三(八二)五〇〇七
（庄川水記念公園、庄川大仏、舟戸合口ダム 他）
講師 庄川美術館 館長 松村 樹 先生
締切 十一時半厳守
会費 二句出句 千円
交通 JA高岡駅前よりバス庄川支所前
JA砺波駅前よりバス庄川支所前
北陸自動車道砺波インターより車で二十分

合同句集（第四十一集） 原稿募集

句集を次のとおり刊行いたします。同封の原稿用紙により全員こぞってご応募ください。

○作品数 十五句（平成二十七年七月から平成二十八年六月までの自選句）
○記載要領 所定の原稿用紙に姓号、（ふりがな）作品（春夏秋冬の順が望ましい）本姓名、生年月日、郵便番号、住所、電話番号、所属結社または句会名を記載する。希望者は住所等の未掲載も可。
かなづかいは新旧混用せず何れかに必ず○を付けること。
○締切 七月二十三日 必着厳守。
○出句料 三千円（一冊進呈）
同封の振替用紙で原稿発送と同時に郵便局へ払い込むこと。
○送付先 〒九三五―〇〇〇五
氷見市栄町一〇―二六
坂田直彦方
富山県俳句連盟合同句集係宛
○刊行予定 十月

富山県芸術祭主催 富山県民芸術文化祭参加 富山県俳句連盟秋季俳句大会（予告）

講師 立山散策案内人 佐藤武彦先生
日時 十月一日（土）午後一時
会場 北日本新聞ホール
※ 第十回越中讃歌募集句のテーマは食

春季俳句大会作品抄

◇ 暮目良雨先生 特選句

啓蟄のきつちり量る調味料　川井　城子
てふてふは神の折り紙かもしれぬ　柄沢　恭子
桐箱の金平糖や女正月　山口ミイ子
凝らす眸の中をくづれてゆく海市　片桐　久惠
人間のすきまを埋めるさくらかな　近藤　渥子

◇ 連盟選者特選句

義信選 利休忌の帯直しあふ控の間　浅尾　京子
順子選 春めくや男結びの縄を解く　島倉　春美
冬青選 ばか長き昭和のホーム蝶渡る　森野　稔
英子選 ほがらかな風が来ている花辛夷　川上　淑子
玲子選 一度だけ父の拳骨柏餅　平澤　宏修
置箔選 ぐいぐいと乳吸ふ吾子や五月来ぬ　堀　禮子
康裕選 迷ひなき一念通し受験の子　小幡富貴子
久恵選 全山の奏でてをりし雪解急　田上眞知子
城子選 受験子の灯の消えてより母の灯も　荒田眞智子
ゆう子選 鯉のぼり子は母に似て草食系　細井　節子
弥生選 雛しまふうつし世遠く遠くして　室井千鶴子
富美子選 灯台の細身に鳥の帰るなり　長沼三津夫
美智子選 人間のすきまを埋めるさくらかな　近藤　渥子
洋子選 春泥やジュラ紀の如き重機群　長谷田泰男
直彦選 立つて漕ぐ嬉しき時のぶらんこは　藤井　詩耕
一子選 春寒し土偶の胸のとんがりて　大倉　寿恵
春美選 たまゆらの海市に沸きぬ小津の浜　板谷野々江
重之選 人間のすきまを埋めるさくらかな　近藤　渥子
吉章選 横断の手を高高と進級す　島倉　千春
桂子選 春光の一塊となり稚魚の群　酒井きよみ
恵子選 遊ぶごと母は畑に花菜風　野村美智子
圭二選 「花は咲く」歌うてをりぬ葱坊主　土田　由朗
昭夫選 罠のように春炬燵あり寄りにけり　久保　俊一
眞知子選 母連れて四温の一時帰毛かな　酒井きよみ
寿山選 ひなまつり昭和の子等の歌今も　内田　邦夫
長穂選 春光や一鑿ごとに撫でて彫る　酒井美和子
徳子選 春の雲八十二年の生命線　吉見　啓子
京子選 薄氷を割る児避ける児ぶつける児　安藤やすを
三久選 少年の声を返して山笑う　林　紀男
達哉選 利休忌の帯直しあふ控の間　浅尾　京子

三津夫選 迷ひなき一念通し受験の子　小幡富貴子
宗承選 姦しい声に頬染め男雛　菅原　純子
敏子選 菜の花のかなた耀ふ剣岳　姫見　絹子
博信選 はらからの祖を語り合う春の月　数井　春美
真理子選 凝らす眸の中をくづれてゆく海市　片桐　久惠
多佳子選 青き踏む踏んで忘るるほどの悔い　関　昌子
栄子選 春空の命の鼓動蔦の笛　池田フサ子
幸子選 二杯目の紅茶薫らせ花の雨　菅野　桂子
賢選 バケツごと花苗買って日曜日　田中　徳子
千鶴子選 山笑ふコンテナ繋げるだけつなぎ　酒井千枝子
稔選 風呂敷の結び目はらり鳥雲に　野坂千佳子
とおる選 風光る少年の押す車椅子　堀　智恵子
白羊選 若竹やひとり暮しへ旅立つ子　横井　生子

◇ 入賞句

天位⑪ てふてふは神の折り紙かもしれぬ　柄沢　恭子
地位⑨ 一度だけ父の拳骨柏餅　平澤　宏修
人位⑧ 針箱の箆に妣の名あたたかし　古小路憲子
4位⑦ ほがらかな風が来ている花辛夷　川上　淑子
〃⑦ 電柱というぶつきらぼう木々芽吹く　漁　俊久
〃⑦ 卒業すどの子も一つ褒められて　野村　邦翠
〃⑦ 春光や一鑿ごとに撫でて彫る　酒井美和子
〃⑦ 利休忌の帯直しあふ控の間　浅尾　京子
〃⑦ 夫在ればこその妻の座鳥雲に　島田おたか
〃⑦ 青き踏む踏んで忘るるほどの悔い　関　昌子
〃⑦ 立つて漕ぐ嬉しき時のぶらんこは　藤井　詩耕
〃⑦ 春光の一塊となり稚魚の群　酒井きよみ
〃⑦ 人間のすきまを埋めるさくらかな　近藤　渥子
5位⑥ 七色の付箋こまめに合格す　川井　城子
〃⑥ 箸持ちて居眠りする児蝶の昼　杉本　恵子
〃⑥ ぐいぐいと乳吸ふ吾子や五月来ぬ　堀　禮子
〃⑥ あやとりの迷へる指や山笑ふ　岡本　芙美
〃⑥ たまゆらの海市に沸きぬ小津の浜　板谷野々江
〃⑥ 若者が戻りし村の祭かな　川上　弥生
〃⑥ 追肥して申し分なき春の雨　土居ヨシエ
〃⑥ 骨だけのビニールハウス雪解村　高木　昭夫
〃⑥ 挨拶は先ず雪のない話から　清水　麗子
〃⑥ 春風に乗りたる心地ペダル漕ぐ　稲田　節子
〃⑥ 春寒し土偶の胸のとんがりて　大倉　寿恵
〃⑥ 春の土蹴って弾んで逆上がり　中　やす子
〃⑥ 横断の手を高高と進級す　島倉　千春
〃⑥ 窯出しのパンの焼色冬ぬくし　野中多佳子
6位⑤ 手も足も動く今日あり青き踏む　金山　千鳥
〃⑤ 春昼の鴨徳利の座りよき　宮田　悦子
〃⑤ よろこびはソプラノで言う合格子　中島　黎子
〃⑤ 受験子の灯の消えてより母の灯も　荒田眞智子
〃⑤ 母の胸父の背が好き春祭　荒田眞智子
〃⑤ 春の夢いまだ昔の名刺持ち　安藤やすを
〃⑤ ふりむけば杖ふる母や春夕焼　森　純子
〃⑤ ふだん着のやうなタンポポポと咲く　中川　静子
〃⑤ 手を上げるのみの挨拶農具市　吉田　泰子
〃⑤ 下宿屋の名は緑荘卒業す　石灰　潤子
〃⑤ 知事室に逆さ地図あり鳥帰る　町田　忠治
〃⑤ 山国の日は逃げやすし吊し柿　吉畑允文枝
〃⑤ 燕来るトロッコ電車の始発駅　吉﨑　陽子
〃⑤ バケツごと花苗買って日曜日　田中　徳子
〃⑤ 職人に若手がひとり山笑ふ　鈴木　芹子
〃⑤ 登校のペダル立ち漕ぎ朝ざくら　中坪　達哉
〃⑤ 群青の星のかけらや螢烏賊　山西　肇野
〃⑤ 糠床は機嫌よろしく春立てり　平澤　敏子
〃⑤ 遊ぶごと母は畑に花菜風　野村美智子
〃⑤ 畦切って春田に水のゆきわたる　大坪沙智子
〃⑤ 拭き細る千本格子涅槃西風　東　霊女

富山県現代俳句協会

秋季吟行俳句大会（予告）

日　時　九月四日（日）午前十時受付
会　場　岩瀬公民館（富山市岩瀬御蔵町一番）
吟行地　会場至近の大町新川町通り散策
参加費　千円

第十一回ジュニア俳句大会 表彰式
日　時　十一月十二日（土）
会　場　富山県教育文化会館

俳人協会富山県支部

俳句大会（予告）

協会員以外の方のご参加も歓迎いたします。

日　時　九月二十二日（木・秋分の日）
会　場　富山電気ビル　午後一時
講　師　「雲の峰」主宰　朝妻　力 先生

講演要旨

ライバルとしての秋櫻子と素十

「自然の真と文芸上の真」論争に隠されたもの

俳人協会評議員
「春耕」編集長　藤田直雨

ライバルが居てこそ進歩があるのは世の常。一世を風靡した虚子のホトトギスの時代にあって昭和初期に黄金時代を築いた代表に四S（よんえす・しえす）が挙げられる。

四Sはよきライバルであり「東に二Sあり」「西に二Sあり」と定義したのはホトトギス発行所で行った山口青邨の講演に始まる。昭和三年九月のこと。この内容に同感した虚子が翌昭和四年一月号ホトトギスに「写生ということ」と題した論を書き四Sの存在を追認して素十、秋櫻子、誓子、青畝の順番に作品と傾向を論じた。実際は傾向の違う四人を四Sとして一括りにして「写生によって大成し得た」と強調したのは、やがて素十以外は写生の道を外れて進むだろうという予感があり、できれば写生の世界に四人を囲み込みたい思惑があったのだと思う。

虚子の予想の通り四Sはその後それぞれの道を歩むことになったのは皆さまご存知の通り。

ここではよきライバルとして素十と秋櫻子のその後について考察してみたい。

東京帝大医学部法医学教室で血清化学を学んでいた秋櫻子と素十は大の仲良し。教室の野球チームで秋櫻子はキャッチャー、素十はピッチャーをやり楽しい学園生活を送ったことが村山古郷著『大正俳壇史』（角川書店）に詳しく描かれている。

素十は茨城の取手在の農家に生まれ（註1）蛮カラな性格、秋櫻子は神田で二代続いた産婦人科の家に生まれ繊細で酒も煙草もやらないお坊ちゃんであったが、性格が違う二人が親友になったのは俳句のお蔭である。

初めに俳句を始めたのは**秋櫻子**で、短歌を窪田空穂に学んでいた。当時学内には、長谷川零余子を指導者に帝大俳句会があり、医学部助手をしていた中田みづほが運営を担当していた。秋櫻子は中田みづほに頼んで帝大俳句会に入れてもらった。

この**帝大俳句会**はやがて零余子がホトトギスを辞めたために消滅し、幹事のみづほも新潟医科大学外科助教授として新潟へ転出してしまった。

中田みづほが中央俳壇で活躍出来なかった理由に新潟への転出が挙げられる。秋櫻子もみづほも素十もほぼ同学年で俳句のキャリアはみづほが一番古く、次に秋櫻子、最後に素十の順である。

東京では秋櫻子が帝大俳句会に真似て**東大俳句会**を興し虚子を選者に迎えて牛込区船河原にあったホトトギス発行所で句会が開かれるようになる。ホトトギス発行所はすぐ直後に大正十二年一月丸ビル623区に移転したがここで東大俳句会も開かれた。素十が参加したのはこの東大俳句会からであるが入って一年も経たないうちに関東大震災が起きた。俳句に夢中になっていた素十や秋櫻子は震災後四五日経ってもう句会を始めるようになった。素十は文京区菅羽の叔父の家に居候（註2）していてこの家は新築のため地震の被害を免れていたのである。

関東大震災は東京の下町の惨状が強調されているが、この時、横浜に住んでいた**前田普羅**も家を全焼し露頭に迷っていた。翌大正十三年五月に報知新聞富山支局長の辞令を貰うと五分で決断し翌日横浜を離れた。富山に入りここで「辛夷」を再興し前田普羅富山にありと天下に示したのは関東大震災の大いなる被害者であったことが一因である。震災後四五日目に句会に遊んだ素十や秋櫻子たちとは大いに違っていたことを知っておきたい。また、関東大震災で津波が起こったことはよく知られていないであろうが、相模川を遡った津波で厚木市民に犠牲者が出たことなども知っておきたい。

さて新潟に移った中田みづほはどうしていたかというとやがて脳外科教授になり新潟でのホトトギスの橋頭堡を築くために俳誌「**まはぎ**」を昭和四年九月に発行し写生俳句の普及に努めた。みづほには新潟医科大学教授濱口今夜という良き友がいた。みづほと今夜は「まはぎ」の会員を啓蒙するために「まはぎ」誌上に「**句修業漫談**」なる対談を連載した。昭和四年十二月号からのことである。みづほと今夜は共に学識が深く芸術に対する認識も深いものがあった。対談の内容は「写生俳句」の大切さを説くもので、虚子の教えに従えば間違いはない、素十のように未だ経験が浅いながらも写生の大切さを重んじる態度が誠の籠る俳句作品を生み続けていると熱く説くのであった。

この頃ホトトギスには写生のみでは面白くないと独自の路線を歩くものが出始めていた。秋櫻子などもこの一人で「筑波山縁起」のように連作を試みたりしていたが、虚子は、東大俳句会のリーダーたる秋櫻子ということもあり黙認していたのだが、「句修業漫談」の内容は虚子自らの言葉としてもおかしくないと考え、地方の俳誌である「**まはぎ**」**の掲載文を十二の内七つをホトトギスに掲載**することになった。昭和六年一月号から同年五月号迄である。

この中に「**秋櫻子と素十**」（**昭和六年三月号ホトトギス**）という文章があり、この内容に秋櫻子が怒って、この年の「馬酔木」十月号に「自然の真と文芸上の真」を秋櫻子が書いてホトトギスを集団で辞めたとされるのが「**自然の真と文芸上の真**」**論争**と言われるものである。（註3）

これに虚子が反応しホトトギス十二月号に「厭な顔」を執筆掲載し、「信長（虚子）がかっての家来だった栗田左近（秋櫻子）を切ってしまえと命ずる」場面で終る内容が、いかにも虚子と秋櫻子の関係を暗示するものとして俳壇では認識されてきた。（註4）

ホトトギスに転載された「句修業漫談」は実に一年以上前に「まはぎ」に掲載されていて、これまでずっと仲の良かったこともあり、みづほは秋櫻子に送り続けていて秋櫻子も読み、内容に反論することも無かったのである。それが急にホトトギスに掲載されてから怒りだしたという理由の一つに、地方の俳誌に掲載されたことは致し方ないが、それをわざわざホトトギスに転載したことが許せないと秋櫻子が言ったとされる。

「まはぎ」は資料として閲覧することがこれまで難しかったのであるが、「**まはぎ**」**の中田みづほを慕う新潟医大関係者**（**雪**）**主宰蒲原ひろし先生を中心に**）**の努力によって復刻版が刊行**され、「まはぎ」に掲載された「句修業漫談」を具に読むと、その内容は至極穏当であり、決して秋櫻子を貶す内容になっていないことが分かる。

秋櫻子と素十の「自然の真と文芸上の真」論争（実際は素十はほとんど反論していない）は本当のところ何を目的に行われたのであろうか。俳句で結ばれた親友が、ある日を境に突如喧嘩別れをすることがあるのだろうか。何か裏に隠されていることはないのだろうか。この論争を考えると次々に疑問が起こってきてしまう。

袂を分かった素十と秋櫻子はその後

◇素十は客観写生を貫き、戦時中も戦争協力の俳句は作らなかった。

◇**秋櫻子は主観写生を目指し、戦時中の新興俳句運動勃興のきっかけを作った。この運動の中で「京大俳句事件」などの俳句弾圧が起こってしまった。**

結果的には「自然の真と文芸上の真」論争が、虚子から離れて自由になった秋櫻子とその仲間たちによる新興俳句運動の流れを作ったと言えるのではないだろうか。

素十はこの論争が終わった昭和六年十月に千葉富士子と結婚し翌七年七月新潟医科大学法医学助教授として赴任。十月ドイツへ二年間留学。虚子に寄り添いながら「ホトトギス」「まはぎ」「玉藻」へ投句。新潟医科大学退官後昭和三十二年六十四歳で「芹」を発刊し会

員は五百名を越えないようにと常々言っていた。句集は三冊のみ。享年八十三。

秋櫻子は水原産科病院と水原産婆學校を経営、宮内省侍医や昭和医大産科教授を歴任。虚子に対抗する一大潮流を築き上げた。「馬酔木」は会員八〇〇〇人とも言われた。句集は二十二冊。享年八十八。

昭和四年から昭和六年にかけての「自然の真と文芸上の真」論争の裏に文字の記録には残せない何かがあるのか、興味は尽きないのである。

「自然の真」を曲げなかった高野素十の俳句

ひつぱれる糸まつすぐや甲虫
翅わつててんたう虫の飛びいづる
甘草の芽のとび〳〵のひとならび
（この句から「草の芽俳句」と揶揄された）
方丈の大庇より春の蝶
空をゆく一とかたまりの花吹雪
翠黛の時雨いよいよはなやかに
書初めのうゐのおくやまけふこえて
菊の香や灯もるる観世音

「文芸上の真」を目指した水原秋櫻子の俳句

葛飾や桃の籬も水田べり
天平のをとめぞ立てる雛かな
啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々
冬菊のまとふはおのがひかりのみ
薔薇の坂にきくは浦上の鐘ならずや
瀧落ちて群青世界とどろけり
朝寝せり孟浩然を始祖として
羽子板や子はまぼろしの隅田川

（註1）高野家の子でなく再婚同士の父の連れ子という話。

（註2）叔父高野毅は長岡ガス会社のオーナーで代議士も経験。素十はこの叔父に庇護された。

（註3）素十はこの頃ホトトギスに投句を自粛していたが、秋櫻子がホトトギスを辞めると聞いた途端に素十に向かって「それでは君は雑詠に復活したまえ」と言った。投句自粛の理由は曖昧。

（註4）後に「厭な顔」のモデルは居たのかと上村占魚に虚子が尋ねられた時に、「モデルは誰も居なかった」と答えた。

◇受賞

第三十四回とやま文学賞　小坂優美子

◇消息

○富山県現代俳句協会は平成二十八年度総会、及び俳句大会を三月二十六日（土）県教育文化会館にて開催。出席五十一名

天位　野火叩く腕が昭和を知っている　八尾とおる

地位　ニュートリノなんの事やら目刺焼く　漁俊久

人位　海抜を表示の校舎葉業す　西田広子

◇句集出版紹介

関一枝「四・三・九」　平27・11

脇坂琉美子合同句集「俳句の宙」　平27・12

横山春枝遺句集　吉野恭子「あやとり」　平28・1

黒﨑潔「好日」　平28・3

高村寿山「花鳥風月」　平28・3

海程富山「鮮」18号　平28・3

みのり俳句会合同句集第10号　平28・3

城端俳句協会会誌第二十二号　平28・3

射水野俳句会「射水野」　平28・5

第35回 とやま文学賞 作品募集

俳句　未発表句　二十句
（B4四百字詰原稿用紙を使用）
締切　平成二十八年九月末日
送り先　〒930-0096 富山市舟橋北町七-一
㈳富山県芸術文化協会事務局
〈とやま文学賞〉係宛

編集後記

連盟会報82号をここにお届け致します。次回83号は平成二十八年十二月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば、**原稿用紙**記入の上、左記に送付下さい。（郵送又はFAXのみ）

〒九三九-一八一一　南砺市理休二二六
川井城子
FAX・TEL（〇七三）六一-一三〇八

平成27年度　収支決算報告

（単位：円）

収入の部 科目	予算額(A)	決算額(B)	差(B−A)	備考	支出の部 科目	予算額(A)	決算額(B)	差(B−A)	備考
会費	1,400,000	1,166,000	△ 234,000	583名分 3月末会員数 632名	事務費	450,000	413,713	△ 36,287	通信費 349,605 委託費 11,000 消耗品費 45,548 その他 7,560
過年度分会費	50,000	33,000	△ 17,000	12名分＋合同句集3名分	会議費	80,000	57,706	△ 22,294	
助成金	150,000	150,000	0	県芸文協	事業費	1,100,000	786,790	△ 313,210	大会 654,070 会報 123,400 越中讃歌 450 その他 8,870
寄附金	5,000	0	△ 5,000		交通費	200,000	159,700	△ 40,300	
合同句集代金	1,200,000	1,080,000	△ 120,000	第40集 360部	負担金	55,000	35,000	△ 20,000	県芸文協 35,000
雑収入	1,000	38,543	37,543	夏季吟行会残金・利息他	合同句集発行費	1,200,000	1,168,560	△ 31,440	450部発刊
繰越金	687,476	687,476	0		雑支出	60,000	24,299	△ 35,701	慶弔費 22,549 振込手数料 1,750
					予備費	348,476	509,251	160,775	
合計	3,493,476	3,155,019	△ 338,457		合計	3,493,476	3,155,019	△ 338,457	

（収支差額　509,251円は平成28年度へ繰越）

平成28年度　収支予算

（単位：円）

収入の部 科目	予算額(A)	前年度予算額(B)	差(A−B)	備考	支出の部 科目	予算額(A)	前年度予算額(B)	差(A−B)	備考
会費	1,300,000	1,400,000	△ 100,000	650名分	事務費	450,000	450,000	0	通信費 355,000 委託費 15,000 消耗品費 60,000 その他 20,000
過年度分会費	50,000	50,000	0	25名分	会議費	80,000	80,000	0	
助成金	150,000	150,000	0	県芸文協	事業費	1,200,000	1,100,000	100,000	大会 750,000 会報 150,000 会員名簿200,000 その他 100,000
寄附金	5,000	5,000	0		交通費	200,000	200,000	0	
合同句集代金	1,200,000	1,200,000	0	400部	負担金	55,000	55,000	0	県芸文協 55,000
雑収入	1,000	1,000	0		合同句集発行費	1,100,000	1,200,000	△ 100,000	450部
繰越金	509,251	687,476	△ 178,225		雑支出	60,000	60,000	0	関係先連盟手数料等払込 他
					予備費	70,251	348,476	△ 278,225	
合計	3,215,251	3,493,476	△ 278,225		合計	3,215,251	3,493,476	△ 278,225	